

医学科1年次教育科目「臨床医学入門」における ワークショップ授業の教育効果

The Effect of Workshop in Introduction to Clinical Medicine for 1st Grade Medical Students.

加藤 博之*、松谷 秀哉*、
大沢 弘**、中根 明夫***

Hiroyuki KATO, Hideya MATSUTANI, Hiroshi OSAWA, Akio NAKANE

要 旨

【背景と目的】 医学部医学科1年生に対し、入学後のモチベーションの低下を防ぎ、医師のプロフェッショナルリズムを意識させながら、能動的な学習姿勢を涵養する教育方法は、未だ確立されたものがない。本学では1年次に「臨床医学入門」の授業を行なって、この問題への対応に努めているが、その一環として行われたワークショップ授業と教育効果について報告する。**【対象と方法】** 1年生を対象とし、平成21年度より開講している科目「臨床医学入門」の一環として6月にワークショップを実施した。学生を小グループに分け、まず附属病院内の七夕飾りとして、患者・家族が願い事を書いた短冊を見せた。その後「患者さんの願いと医師が果たすべき役割」をテーマとして、KJ法を用いてプロダクトを作成し、全員の前で発表した。更に自由記載形式のアンケートで、ワークショップの感想を記載してもらった。**【結果】** プロダクトにまとめられた学生たちの意見は、患者・家族の願いは想像以上に多様であり、また医師や医療に対する期待は大きく、切実な思いを痛感したとするものが多かった。アンケートでは、患者・家族の期待に応えるための努力の必要性、高い目的を持ち真剣に学ぼうとしている仲間への尊敬、グループワーク自体が将来のチーム医療の練習であるなど、医師を目指す上での認識を新たにしているものが多かった。**【結論】** 1年生に患者・家族の医療に対する思いを情報として伝え、かつ同級生同士討論することは、医師の社会的役割を改めて認識させると同時に、学習に対する有力な動機付けとなりうる。

キーワード：初年次教育、医学生、プロフェッショナルリズム、KJ法

【背景と目的】

医学部医学科1年生に対し、大学入試の受験勉強の重圧から解放されて生じる入学後の学習へのモチベーション低下を防ぎ、さらに医師のプロフェッショナルリズムを意識させながら、能動的な学習姿勢を涵養する教育方法は未だ確立されたものがあるとは言いがたい。本学では平成21年度より、1年次に

* 弘前大学大学院医学研究科総合医学教育学

Integrated Medical Education, Hirosaki University Graduate School of Medicine

** 弘前大学医学部附属病院総合診療部

Department of General Medicine, Hirosaki University Hospital

*** 弘前大学大学院医学研究科感染生体防御学

Microbiology and Immunology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

「臨床医学入門」の授業を行なって、この問題への対応に努めている。本科目は週1回、通年で授業を行っており、その内容は表1のごとく多彩である。入学直後の自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」から始まり、本稿で紹介するワークショップや、本学医学部の歴史、県内地域医療の現状、地元を知るための「津軽学」、アーリーエクスポージャー実習、模擬患者とのコミュニケーション実習¹⁾など、医師になるための学習意欲を高め、医師のプロフェッショナルリズムの涵養を目指した教育内容となっている。本稿では、「臨床医学入門」の授業の一環として6月に行なっているワークショップ「患者さんが医師に求めるもの」の内容とその効果について報告する。

表1 1年次「臨床医学入門」の内容（平成25年度の例）

前期日程

回数	開講日	講義内容
1	4月10日	「臨床医学入門」オリエンテーション
2	4月17日	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(1)
3	4月24日	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(2)
4	5月1日	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(3)
5	5月8日	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(4)
6	5月15日	講義「弘前大学医学部の歩みとこれから－診療編」(1)
7	5月22日	講義「弘前大学医学部の歩みとこれから－教育編」(2)
8	5月29日	講義「弘前大学医学部の歩みとこれから－研究編」(3)
9	6月5日	ワークショップ授業「患者さんが医師に求めるもの」(1)
10	6月12日	ワークショップ授業「患者さんが医師に求めるもの」(2)
11	6月19日	講義「現場の医療を知ろう」(1) 小児科
12	6月26日	講義「現場の医療を知ろう」(2) 麻酔科
13	7月3日	講義「津軽学」(1)「白神の魅力」
14	7月10日	講義「津軽学」(2)「医学津軽弁」
15	7月17日	総合演習

後期日程

回数	開講日	講義内容
1	10月2日	ワークショップ「アーリーエクスポージャーから学んだこと」(1)
2	10月9日	ワークショップ「アーリーエクスポージャーから学んだこと」(2)
3	10月16日	講義「津軽学」(3)「世界からこころのふるさと津軽を考える」
4	10月23日	講義「現場の医療を知ろう」(3) 産婦人科
5	10月30日	講義「模擬患者さんと話してみよう」
6	11月6日	実習「模擬患者さんと話してみよう」(1)
7	11月13日	実習「模擬患者さんと話してみよう」(2)
8	11月20日	実習「模擬患者さんと話してみよう」(3)
9	11月27日	実習「模擬患者さんと話してみよう」(4)
10	12月4日	講義「現場の医療を知ろう」(4) 地域医療
11	12月11日	講義「津軽学」(4)「ねぶた絵の歴史」
12	12月18日	講義「津軽学」(5)「津軽の歴史」
13	1月8日	まとめのワークショップ「医師になるために大事なもの」(1)
14	1月22日	まとめのワークショップ「医師になるために大事なもの」(2)
15	1月29日	総合演習

【対象と方法】

対象としたのは1年次学生である。本ワークショップ授業は、毎年6月に実施しており、時間は3時間程度である。ワークショップで取り組むテーマを「患者さんの願いと医師が果たすべき役割」とし、学生たちが自ら考え、まとめ、そして発表する形式を取っている。1年次学生を学年の半分ずつ2回に分けて行っており、各回では学生を6～7名ずつの小グループに分けてグループ作業を行う。

具体的には、まずワークショップの冒頭で、毎年6月末から7月初旬に附属病院の玄関に飾られる七夕飾り（図1）の短冊を見せた。この季節、本学附属病院の玄関には、短冊の用紙が用意され、患者さんやその家族が自由に「願い事」を書いて、笹につけることができるようになっている。短冊には図2、図3に示すように患者・家族のさまざまな率直な思いが綴られている。これらの短冊の写真や、さらに写真で示しきれない他の短冊に書かれた内容も学生たちに紹介した後、「患者さんやご家族は、どんなことを願っているのでしょうか?」、さらに「期待に応えるためには、医師はどんな役割を果たすべきだと思いますか?」と学生たちに問いかけ、これに対する答えをグループ毎にKJ法を用いて考え、討論を通じてプロダクトとして作成し、参加者全員の前で発表した。終了後、学生に自由記載形式のアンケートを行い、ワークショップを通じて感じたことを記載してもらった。



図1 附属病院玄関に飾られた七夕飾り

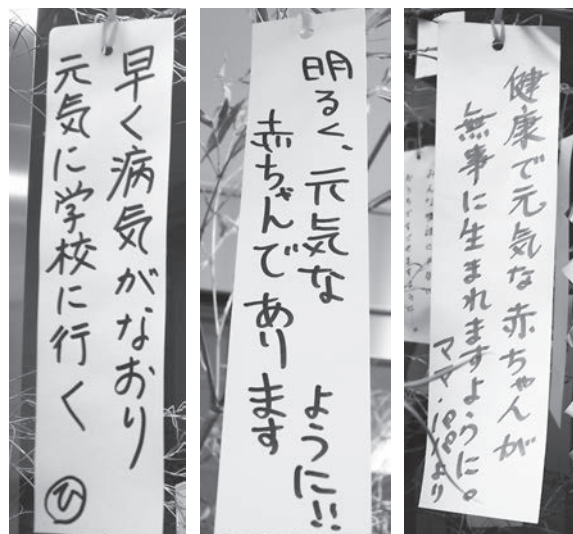


図2 患者・家族が描いた七夕飾りの短冊の例 その1

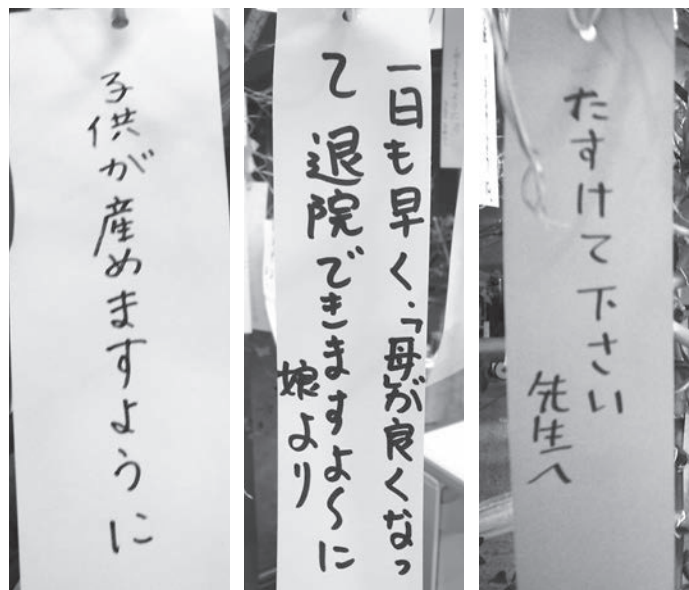


図3 患者・家族が描いた七夕飾りの短冊の例 その2

【結果】

1. ワークショップ全体として

KJ法を用いたワークショップについては学生たちはすぐに要領をつかんで順調に作業を進め、様々なアイデア・意見を出し合い、熱心に討議を重ねて課題に取り組み、プロダクトを作成して参加者全員の前で発表した(図4)。完成されたプロダクトにまとめられた学生たちの意見は、患者や家族の願いは「普段通りの生活」、「がんの撲滅」、「痛みの軽減」、「病気の進行防止」、「丈夫な赤ちゃん」、「こどもが欲しい」、「新薬の開発」、「手術の成功」、「家族の回復」、「こころも救って」等、想像以上に多様であり、また医師や医療に対する期待は非常に大きく、切実な思いを持っていることを痛感したとするものが多かった。図5にまとめのプロダクトの一例を示す。



図4 完成したプロダクトの発表とそれに聴き入る学生たち

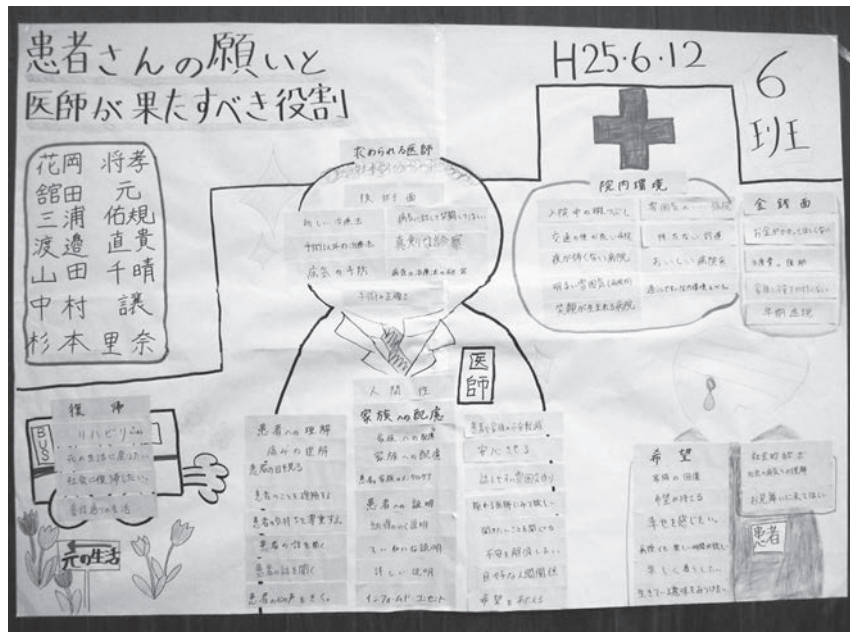


図5 学生たちが作成したプロダクトの例

2. アンケート結果について

アンケートに記載された内容を見ると、①患者・家族の期待に応えるための努力の必要性、②高い目的を持ち真剣に学ぼうとしている仲間たちへの尊敬、③グループワーク自体が将来のチーム医療の練習になっていると感じた、など、医師を目指すことについての認識を新たにしているものが多かった。以下に代表的な意見を記す。

①患者・家族の期待に応えるための努力の必要性

- 「患者さんの願いは本当に様々で、その一つ一つに医師の果たすべき役割がある」
- 「七夕の短冊に書かれた願いが胸に刺さった。患者の願いに応えられる医師になりたい」
- 「患者さんの願いは、自分で想像していたものより重みがあった」
- 「すべてを実現するには大変な時間と労力が必要だが、頑張りたい」

②高い目的を持ち真剣に学ぼうとしている仲間たちへの尊敬

- 「同じ班の中でも『こういう意見もあるのか!』と新鮮だったし感心した」
- 「他の人の思考に触れることで、新しい価値観が生まれたり、自分の思慮の浅さを思い知るなど、良い刺激になった」
- 「同じ学年の皆が、それぞれしっかりした考えを持っていて、また自分には思いつかないようなことを考えていることを知り、とても刺激になった」
- 「こんなに志が高く、優秀な仲間がいることに感謝」

③グループワーク自体が将来のチーム医療の練習になっている

- 「数人で協力しながら行う作業が、将来チーム医療を行う上で大切なことも学べた」
- 「班員全員で協力して完成させることができ、達成感があった。協力することは臨床の現場でも重要だろう」
- 「他人の意見を聞いて正確に理解する作業、自分の頭の中にしかないことを言葉にして正確に他人に伝える作業を行った。両方医師になったときに必要とされる能力なのだろう」

【考察】

1年次「臨床医学入門」の目的は、1年生から医師のプロフェッショナルリズムの涵養を図ることが挙げられる。医師のプロフェッショナルリズムの捉え方は種々存在するが²⁾、本学ではわかりやすく表2のように3つの内容から成ることを教えている。この中でPublic professionalism（社会に対するプロフェッショナルリズム）、即ち医師としての社会的責任を果たすことは、3つの中では最も学生（特に低学年の学生）に自覚させることが難しい。己の医師としての社会的責任や役割を真に実感するためには、医師としての相当な力量（技量）や診療実績に裏打ちされる必要があり、その観点からすれば医学科1年生の語る「医師の社会的責任」は当然のことながら概念的であり表層的である。換言すれば、自らの「なりたい医師像」に向かって邁進するエネルギーに比し、医師として社会的責務を果たそうとする意欲は相対的に希薄であると言えるかもしれない。このような状況の1年生に対し、少しでも医師として社会的責務への自覚を芽生えさせるためには、患者や家族の医学・医療・医師への期待である「生の声」を伝えるのが有力な方法であると考えられる。本稿で紹介したワークショップは、そのような方法の一つであり、七夕飾りの短冊に描かれた患者・家族の率直な想いを学生たちに見せ、学生同士の討論を通じて、そこから何かを感じ取ってもらい、それを言語化してもらうことを期待して行なっている。学生たちの作成したプロダクトを見る限り、短冊に込められた患者・家族の願いを学生たちは相対的に捉えており、同時に、自分たちの想像以上に医師や医学に対する期待が大きいことに驚き、自覚を新たにした者も多かった。さらには学生同士の討論によってお互いをより深く知ることになり、同級生の医学に対する真剣な姿勢に感銘を受け、お互いの尊敬の気持ちに通じていた。またワークショップの特徴であるグループワークがもたらすグループダイナミクスに、「将来のチーム医療の準備」を感じ取っていた学生も少なからず存在していた。即ちワークショップを通じてPublic professionalism（社会に対するプロフェッショナルリズム）の認識を新たにただけでなく、同級生や将来のチーム医療のメンバーに対するInterpersonal professionalism（他人に対するプロフェッショナルリズム）を芽生えさせたようにも見受けられた。これらのことは総じて学習に対する意欲を刺激し、1年生に対して好ましい学習姿勢への変換を促すように思われる。本学医学科ではこのような学習効果を1年次だけに留めておくことなく、進級しても連続性を持たせるため、2年次に「地域医療入門」、4年次に「Pre BSL（臨床実習入門）」という科目を設け、それぞれワークショップ^{3), 4), 5)}を行なって継続的に自覚を促す教育に取り組んでいる。医師になるための教育は卒後も含めれば10年近くに及ぶ長丁場であるが、このような長期的な視点に立った連続性のある粘り強い教育が肝要であると考えられる。

表2 医師のプロフェッショナルリズム

-
- | |
|--|
| <p>(1) Public professionalism（社会に対するプロフェッショナルリズム）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 社会から期待されている役割を果たすこと • 医師としての社会的責任を果たすこと |
| <p>(2) Intrapersonal professionalism（自分に対するプロフェッショナルリズム）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 職業人として、自らに厳しく、たゆまず精進を続ける姿勢 • 己の限界をわきまえ、恣意的な診療をしないこと |
| <p>(3) Interpersonal professionalism（他人に対するプロフェッショナルリズム）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 患者・家族、同僚など、他者に対し、常に誠意や思いやりをもって配慮ができること • 相手を尊重し、十分なコミュニケーションを取ることができること |
-

【結論】

医学部医学科1年生に、患者・家族の医療に対する率直な思いを情報として伝え、かつ同級生同士討論することは、医師の社会的役割（使命）を改めて認識させると同時に、学習に対する有力な動機付けとなりうることが示唆された。

参考文献

1. 加藤博之, 松谷秀哉, 大沢 弘: 医学科1年次学生に対する, 模擬患者によるコミュニケーション実習の試み. 21世紀教育フォーラム 第6号: 31-40, 2011
2. 大生定義: 医学教育とプロフェッショナリズム. 日医大医会誌 7: 124-128, 2011
3. 加藤博之, 廣田和美, 松谷秀哉, 大沢 弘: 医学科2年次教育科目「地域医療入門」におけるワークショップ授業の教育効果. 21世紀教育フォーラム 第7号: 37-44, 2012
4. 加藤博之, 大沢 弘, 大串和久: 医学部医学科4年次臨床入門科目におけるKJ法を用いたワークショップ授業“How to survive BSL (Bed Side Learning)?”の教育的意義. 21世紀教育フォーラム 第3号: 59-65, 2008
5. 加藤博之, 大沢 弘: 医学生に対する診断の思考過程教育におけるPOS診療録記載演習の意義. 21世紀教育フォーラム 第5号: 31-37, 2010